

戦後80年

いま伝えたい 戦争の記憶

昭和20(1945)年8月15日に太平洋戦争が終戦を迎えてから、令和7(2025)年8月で80年が経過しました。戦争を体験した人々が少なくなる中、その貴重な体験を次世代に引き継ぎ、平和の大切さを広く伝えるため、市民の皆さんから寄せられた戦争体験記を紹介します。

第19回 戦場を駆けた海軍少年兵

ふじさき めいじ
藤崎 明司さん 昭和2年生まれ

昭和17年、私は農学校に通っていましたが、同級生の植松君、高木君と海軍少年兵に志願し、翌年横須賀海兵団に入団しました。3カ月間にわたる基礎教育が終わると、私たちはそれぞれ新しい任務に就くことに。私は横須賀にある海軍砲術学校へ、植松君は海軍水雷学校へ、高木君は海防艦の乗組員となり戦地へ向かいました。その後、植松君は巡洋艦「愛宕」に乗り組み、最前線へ送られました。

第五十六警備隊への配属

その後、私は第五十六警備隊に配属されました。私たちはサイパン島へ向かう陸軍部隊とともに、小笠原諸島の南にあるテニアン島へ向けて横浜港を出航しました。敵の潜水艦に狙われる危険と隣り合わせで、夜も眠れない日々が続きました。

私を含めた550人の兵士が「神鹿丸」という古い貨物船に乗り、荷物や兵器を運んでいました。東京湾を出た直後、陸軍部隊を乗せた貨物船「杉山丸」が敵の攻撃を受けました。それを見た護衛艦「松風」の艦長は神鹿丸に直ちに引き返すよう命令を出しました。幸いにも私たちの船は無事に返ることができました。

その後、私たちは二つの部隊に分けられました。一つは高橋中尉の指揮のもと小笠原諸島にある父島へ向かい、もう一つは太田中尉の指揮のもと伊豆諸島にある八丈島へ向かいました。



入団して間もなく訪れた戦艦「三笠」の見学で(昭和18年)

高橋中尉の部隊は、多くの兵士を巡洋艦に、兵器や食糧を貨物船に分けて運んでいました。不運にも貨物船は小笠原沖で敵の潜水艦に撃沈され、乗組員のうち助かったのは少数だけだったと聞いて、本当に胸が痛みました。

一方、大塚中尉の部隊である私たちは、八丈島で陣地や特攻基地の建設に取り組みました。その途中、特攻隊の10機余りの出撃を見送り、涙が出ました。30分後には全員が敵艦に突入したとの知らせを聞きました。

昭和20年2月16日、私たちは八丈島で大空襲に遭い、170機もの米軍機に襲われました。この攻撃で10人以上の仲間が戦死しましたが、私は運良く、爆弾の破片がすれすれを通り抜けて助かりました。一緒に行動していたサイパン行きの陸軍部隊は、何千人もの米軍の上陸と重なり全滅したという、うわさを聞きました。

戦地を生き延びて

戦争が終わり、3人とも無事に自分の家へ帰ることができました。現在、私は100歳を迎えようとしていますが、軍隊生活の記憶は今でも鮮明です。戦争が終わり、80年以上もの平和な時代が続いています。これも、何百万人もの戦死者のおかげであると感じ、心から感謝しています。残された人生を、この平和に感謝しながら暮らしていこうと思っています。

市では、市民の皆さんから戦争体験記を募集しています。くわしくは市ホームページまたは文化国際課(☎20-1534)へ。



令和8年2月15日号 No.1549



成田市のホームページ
<https://www.city.narita.chiba.jp>

*QRコードは(株)デンソーウェブの登録商標です

*本紙は2月4日時点の情報を掲載しています。最新情報は各ページの問い合わせ先や市ホームページで確認してください。

編集後記

成田空港を中心とした新しい都市圏の名称が「SORATO NRT」に決まりました。空の都を意味する「SORATO」に、市町の結束を表す「NRT」を組み合わせたこの名前。世界に向けて存在感を高めていこうという大きな思いが込められた名前ですが、響きはどこか親しみやすく、思わず口にしてみたくなります。空に近いこの地域がこの先どんな未来を歩んでいくのか、今からとても楽しみです。

リサイクル適性(㊞)
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。